

仏像口唇微笑表現の数量解析

Numerical analysis of Buddhist sculptures' lip smile expression

○小林茂樹¹⁾ 長田典子²⁾

¹⁾ 形相研究所 ²⁾ 関西学院大学

E-mail: kobayashi@keisolabs.com

1. 仏像の造形分析について

仏像の制作は1世紀末頃、古代インドで始まったとされ、以後アジア各地に展開した。その間仏教は、他宗教を取り込んだり、新規に創出した宗教観を基盤として多様な信仰様式（宗派など）を発展させたので、仏像の種類や形式もそれに応じて多様化した。

いっぽう、仏教の伝播につれて、造像の様式はそれぞれの時代や地域あるいは民族的な“好み”を反映したので、実に多種多様な造形表現の仏像が各地に遺存することになった。

像自体に造像の由来や作者名が銘記されたものや、信頼できる記録が残った少数例を除き、大多数の像は文字の記録を有さない。

そのため研究者は、風化・褪色や減損の程度などや素材や造形の様式などを手がかりとして、像の種類や、制作時期や、作者あるいは作風流儀などを推定した。

通常、経典に記載された印相（手の形）や持物（じもつ）や衣服や装飾品などの約束ごとを手がかりに、如来や菩薩など像の種類を推定し、また衣服の形式や衣紋の造形様式を手がかりに作者や作風の推定をすることが多い。

衣服の造形を例にとると、ガンダーラ片岩像に見られる流れるような殊更な襞の表現と、マトゥラー像に見られる身体にまわりついたあかなさかの表現と、襟を合せた中国式衣服などが知られている。

2. 仏像の身体造形表現について

仏像の造形分析は以上述べたように、装身具や髪型などの外形的要素を主たる対象として行なわれてきたと思われる。

宋に渡った日本僧裔然（ちょうねん）が現地で模刻させ、987（寛和 3）年に持ち帰った清涼寺釈迦如来立像は、三室戸寺像や西大寺本尊像としてさらに模刻され、以後百体以上が清涼寺式として制作されたことが知られている。

清涼寺式像の中には、清涼寺像の傍らでなぞるように模刻したとの記録が残る像もあり、頭髪の形式や衣紋の様式において、極めて類似した表現を示している。

しかしながら、模刻像のお顔を見れば、それぞれ独自のお顔であって、決して清涼寺像をなぞっていないことは一見して明らかである。

衣服や髪型の徹底的な模倣と、それぞれ異なる独自のお顔という表現上の断絶は、一体どうい事情からもたらされたものであろうか。

仏像は本来、信仰のよすががあるいは対象として制作されたものであって、顔はそのもっとも重要な宗教的かつ精神的な要素を発信する表象にほかならない。

それにも拘らず、この断絶についての考察あるいは追究は見当たらないのである。

このことは、仏像の顔造形表現そのものが、研究の対象として主体的に取り上げられなかったこれまでの流れの一環に過ぎないかも知れない。

3. 口唇微小表現の数量解析

仏像の顔の表情は、その精神性を表出するもっとも重要な要素と考えられる。慈悲像は多く、微笑によって慈悲の心性を表現することが多かった。

微笑表現は、上方に湾曲した眼、隆起した頬、口角上昇の口唇で構成されることが多く、特に口唇の微笑表現は、仏像誕生以前からアルカイックスマイルとして広く知られてきた。

私たちは今回、古代インド像 39 例（ガンダーラ片岩 22、同ストゥッコ 9、マトゥラー 8）、中央アジア像 22 例、中国像 53 例（北魏・東魏 14、北斉 20、隋・唐 19）日本像 149 例（飛鳥 13、白鳳 14、天平 9、平安 38、慶派 19、円空 33、木喰 23）の計 263 例を対象として、stomion を通る水平線に対する左右 chilion の角度を計測し、左右の平均角度が正の場合を微笑表現として解析した。

その結果、微笑造形が、マトゥラー像あるいはガンダーラストゥッコ像から中央アジア像を経て、中国の北魏・東魏像に引き継がれ、やがては日本の飛鳥像へ伝来したことが示唆された。日本ではその後、白鳳から天平にかけて微笑表現が急減し、平安後期から慶派において遂にゼロ化した。急減は雑密移入期に、またゼロ化は浄土信仰拡大期にそれぞれ同期している。